Proud Your Way

Otakibashi Animal Hospital
Since 1999

―グループ紹介 & 採用案内―

小滝橋動物病院グループ

[グループ理念]

動物たちと、ともに価値と喜びを

[3つの使命]

1. 獣医療を人の医療に近づける
2. ひとつでも多くの命を助ける
3. 動物達と暮らす喜びを拡げる

Contents

Chapter 1

一次診療から高度医療までシームレスに対応するグループ医療の強み

・小滝橋動物病院グループが提供する医療 4
・代表メッセージ 6
・高度医療化の先駆け：心臓外科チームの覚悟 8
・一次診療の中心である分院長たちの想い 10
・専門医療のひとつの柱：脳神経外科チームの新たな挑戦 12
・病院の印象を決める：受付を担当する看護師が築く信頼 14
・グループ医療を支える全員参加型の組織運営 16

Chapter 2

グループの成長を牽引する個人のチャレンジと成長によって実現されるキャリア

・キャリアマップ：活躍のイメージ 19
・キャリアファイル ①：分院長（一次診療を追求） 20
・キャリアファイル ②：医療センター長（高度医療を統括） 21
・キャリアファイル ③：AMC グループ代表 22
・キャリアファイル ④：グループ卒業生（独立開院を実現） 23
・キャリアファイル ⑤：動物看護師（手術助手を確立） 24
・キャリアファイル ⑥：動物看護師（リハビリ科を牽引） 25
・Column：スタッフの向上心を後押しする教育体制 26
・キャリアファイル ⑦：若手獣医師が考えるキャリア 27

Chapter 3

小滝橋動物病院グループ白書

・データ白書 28
・募集要項 30

Chapter 1 小滝橋動物病院グループが提供する医療

一次診療から高度医療まで シームレスに対応する グループ医療の強み

高度医療の展開といっても
高度な医療機器と人材を抱えれば実現できる訳ではありません。
一次診療に立つ獣医師の心構えや連携を生むための工夫など
グループ全体で取り組む姿をご紹介します。

「身近なかかりつけ医」と「高度医療」の両立で質の高い獣医療を提供しています。

分院を中心とした［一次診療］では身近なかかりつけ医として、飼い主さんの気持ちに添うことを第一にできるだけ早く異変に気づくことを大切にします。そして医療センターを中心とした［高度医療］では高度な医療技術と設備により、助けるための選択肢をひとつでも多く、より確実なものにします。そして、双方の質の向上と密な連携により真の安心を提供しています。

5つの一次診療拠点

小滝橋動物病院（本院）
（新宿区）otakibashi.com

市ヶ谷動物医療センター
（新宿区）ichigaya-v.com

もみじ山通りペットクリニック
（中野区）momijiyama.com

江古田の森ペットクリニック
（中野区）egotanomori.com

本駒込動物病院
（文京区）honkomagome-v.com

年間７万件以上の診療実績を持ち、常に最新医療を学ぶことで、正しい医療を提供

2つの高度医療センター

目白通り
高度医療センター
（豊島区）mejirodori-amc.com

CT 設備や腹腔鏡設備を備え、軟部外科を中心に人工透析、人工心肺装置を用いた心臓外科にも対応しています。

新目白通り
第2 高度医療センター
（豊島区）shinmejiro-mri.com

MR検査機器を備え、整形外科、神経外科を中心に手術顕微鏡を用いた脳神経外科にも対応しています。

年間3000件以上の手術実績を持ち高度医療設備の充実とともに専門性を追求

（心臓外科チーム、整形外科チーム、脳神経チーム、腹腔鏡チーム、人工透析チーム、リハビリチーム）

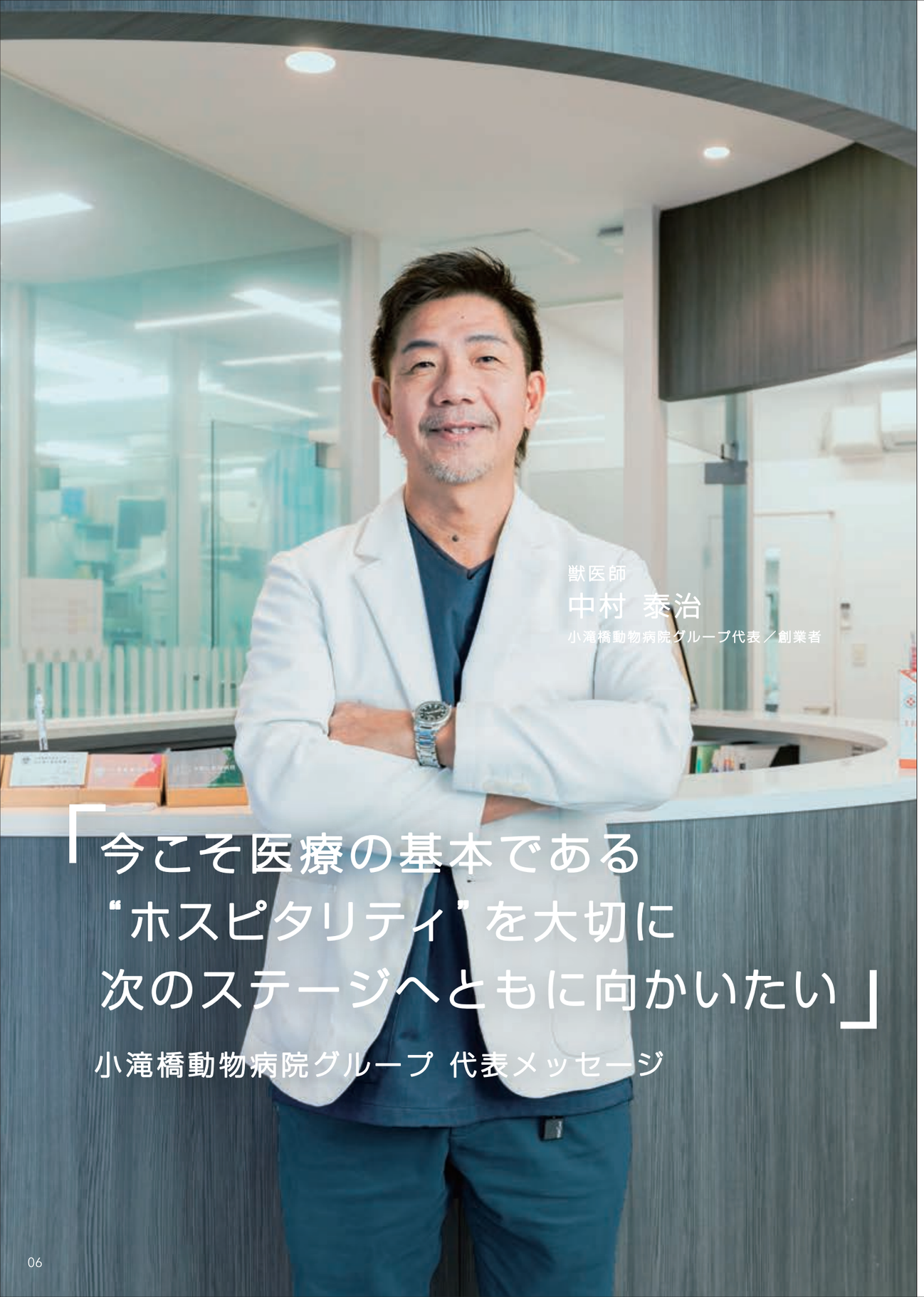
都心で求められる動物病院がコンセプト AMCグループ
（動物医療センターグループ）

経験を積んだ獣医師が診察に立ち、予防医療から高度医療、そして高いホスピタリティを提供できる、飼い主さんの高い期待に応えられる動物病院です。

動物医療センター 元麻布
（港区）amc-motoazabu.com

動物医療センター 白金台
（港区）amc-shirokanedai.com

動物医療センター 赤坂
（港区）amc-akasaka.com



獣医師
中村 泰治
小滝橋動物病院グループ代表／創業者

「今こそ医療の基本である“ホスピタリティ”を大切に次のステージへともに向かいたい」

小滝橋動物病院グループ 代表メッセージ

「ようやく高度医療もカタチになってきましたがまだまだこの先の方が長いと感じています。」

医療の質と同様またはそれ以上にホスピタリティが大事です。

2015年にCTを完備した高度医療センターを立ち上げ正式に高度医療をスタートしました。その後2017年にはMRIを有する第2高度医療センターも開設し、心臓外科をはじめ様々な専門科も立ち上がりました。

ようやく高度医療もカタチになってきたと言えますが、例えば大学病院で活躍されている先生たちのように専門科を代表するような獣医師はまだいないのが現状です。「この人に診てもらいたい、助けてもらいたい」と思ってもらえるレベルにならないと、近隣の病院などからの紹介も増えず、理念に掲げる「ひとつでも多くの命を助ける」に繋がっていきません。

また、短期的には2023年の総合病院開設を目指し、日々取り組んでいますが、まだまだ課題を感じています。

まず専科診療がおこなえる種類や能力の面で、まだまだ大学病院には程遠いことです。日々研鑽を積み、少しでも大学病院のレベルに近づけていきたいと思います。

一方で高度医療が実現したとしても、医療の質だけが飼い主さんの安心や満足とは限りません。医療の質と同様またはそれ以上にホスピタリティが大切になってきます。単に「おもてなしやサービス」という意味ではなく、いかに飼い主さまの立場に立って先を考えられるかが大事だと思います。

そこで2020年から、医療だけでなくホスピタリティを重視した病院を港区に展開しています。そこで培われた医療人の良い心構えを既存のグループにも還流させたいと考えています。

まず人として、そしてチームで。

グループの拡大に伴って社会性（社会的責任）をより重視する必要を感じました。そこでグループ理念を見直し新たに「共に」という要素を加え、「動物たちと、ともに価値と喜びを」という理念にしました。

動物との別れを経験した飼い主さんが「この先はもう飼いたくない」と感じてしまうことがありますが、それはある意味では医療者の責任だと思っています。

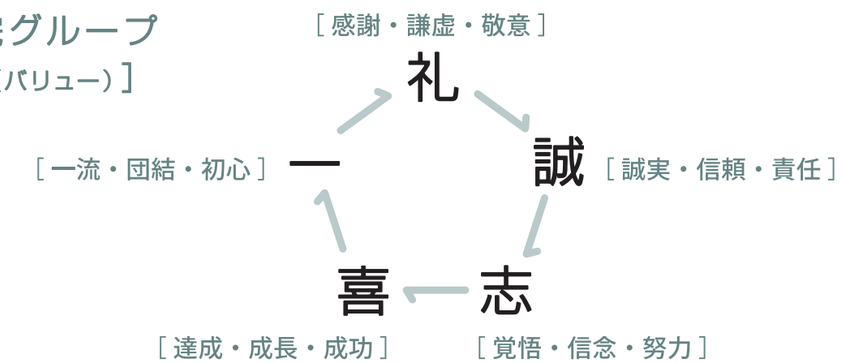
動物の命は人間よりも短く、その間にどれだけ「共に」良い時間を過ごせたか、感謝を感じ伝えることができたか、しっかりとした選択ができたかといったことも含めて医療だと思っています。飼ったことのない人にも動物と「共に」生活をすることの良さを広めることにも貢献したいと考えています。

さらにグループ内部の人間がチームワークを発揮して「共に」活動するという意味も持たせています。

そして新たにValue（バリュー）として5つのキーワードを掲げました。医療人である前に、まず「人として」大切な要素になりますが、仕事を通じて人間育成も行える組織でありたいと考えています。

小滝橋動物病院グループ［5つのValue（バリュー）］

グループ内の各病院、チーム、スタッフそれぞれが、ひとつずつのキーワードに対して成長を重ね次のステップへ進みサイクルを進むことで人間としての成長を続けるイメージです。組織もチーム力の向上により質を高めていきます。



獣医師／獣医学博士
上原 拓也
本院／高度医療センター勤務

動物看護師
清水 七海
小滝橋本院勤務

獣医師
名倉 隼平
もみじ山通りペットクリニック勤務

獣医師
牛尾 俊之
もみじ山通りペットクリニック勤務

「内科治療の限界から根治への挑戦である心臓外科100％の成功を目指して臨みます」

高度医療化の先駆け：心臓外科チームの覚悟

準備の段階で手術の成功は決まっています。チームの連携と意識を高めて臨みます。

Q：心臓外科チームの活動とは？

上原：心臓病には先天的心疾患と後天的心疾患があり、先天的心疾患は手術をしなければ治らない場合がほとんどであり、困られた飼い主さんがご自身で調べて来院されることも少なくありません。後天的疾患の場合は内科的な治療の限界を感じられた外部の病院などから、外科手術の依頼が来ることが多いです。単純に「心臓が大きくなった」と相談が来ることもあります。

牛尾：グループ内に循環器科の症例がいた場合、例えば診察に立つ担当医が心臓の雑音を聴取した際などは、心臓の精査を高度医療センターへ依頼し、病気の特定とステージの判断を行います。ステージによって内服薬を始めるのか、もしくは外科手術の適応となるのかなどについて担当医と相談を行い、担当医から飼い主さまへの説明を行います。
手術になった場合は担当が心臓外科チームへ移行します。内科的な経過も含め担当医と連絡をとりながら継続して状況を診ていきます。術後ある程度の回復がみられたら担当医の病院へ移動して退院です。

Q：手術の進め方や心臓外科チームの特徴は？

上原：手術の成功は事前の準備とコミュニケーションにかかっています。「どう安全に進めるのか」つまり術前に何を準備して、何を把握していないといけないのか、もし問題があったら術後の管理にどうつなげるのかについて皆でしっかり話し合う必要があります。
執刀医でもあるチームリーダーの井口先生が、メンバーの意見をしっかり汲み上げてくれる方なので、キャリアやポジションに関係なく意見を出せる雰囲気が常にあり、コミュニケーションをしっかりとれる体制が築かれています。

名倉：チームでディスカッションをする際、どんな些細な意見でも見逃さず、検討してもらえます。前職時に心臓外科手術には多く関わってきましたが、まだ執刀経験が無い私の提案した術式が採用されることもあり、チームに知識を還元ができることに喜びとやりがいを感じています。

牛尾：手術中に問題が起きた際も、少しの間、その場で手術をストップさせてでも「何がこの子のために一番なのか」全体で状況を理解するために話しあう時間を作ることもあります。また、術後においても手術中の反省とその原因について各個人が調べ、その内容を全体で共有して次に繋げる意識を全員が持っています。看護師さん達も「いま自分に何が必要か」を自ら考え、新たな技術や知識の習得に努める動きがチーム内の良い雰囲気に繋がっていると思います。

清水：いまはとにかく自分たちのスキルアップに一生懸命です。先生たちに質問を投げかけるとしっかり答えてくださるので、職種の隔たりがなく、チーム全体で成長できていると感じています。

投薬を嫌がる動物は多く、飼い主さんとの関係を悪化させる要因にもなり得ます。

Q：今後の展望について？

上原：心不全は動物がとても苦しいのはもちろん、一緒に過ごす飼い主さまもとても辛いです。現在の心臓外科は内科治療の限界から根治への挑戦であり、飼い主さまにとって大事な家族の命運をかけた大切な決断です。私たちも成功率を100％にする気持ちで臨みます。

名倉：投薬は動物だけでなく飼い主さんにとっても負担が大きく、長く続けば続くほどお互いの関係性にも影響してしまいます。心臓手術は大量な薬を飲み運動も制限されている子が、術後1年で薬がなく元気に走れるようになる可能性を与えます。この手術で苦痛から解放される子を1頭でも多く増やしていきたいです。

牛尾：私たち執刀医も「手術を成功させる」意識だけに留まらず「心臓を治す」ことに目を向け、術後の管理もチーム全体で高い意識で臨んでいます。日本で一番信頼され手術の依頼が来る病院を目指していきます。

獣医師
磯野　新
動物医療センター元麻布 院長

獣医師
牧野 祥之
小滝橋動物病院 院長

獣医師
渦巻 浩輔
市ヶ谷動物医療センター 院長

「診察で見落としたらせっかくの高度医療も受けられません一次診療の責任は大きいです」

一次診療の中心である分院長たちの想い

経験だけに頼らず客観的なデータをしっかり読み取ることで正しい診断につながります。

Q：日々の診療において、気を付けていることは？

渦巻：このグループにおいては、自分ひとりで解決することよりも、的確な診断をして、正しい治療のために必要な症例を専門の先生にしっかり送ることが重要だと思います。もちろん主治医としての責任はしっかり最後まで持ちます。

磯野：やはり一次診療あっての二次診療なので、診察の時点で見落としがあると、高度医療まで辿り着かず、適切な治療を提供できなくなります。
一次診療の責任は大きく重要な役割だと思っています。

牧野：ちょっとした異変を見逃さないためには、基本となる健康診断をとても大切に考えています。

Q：的確な診察は、経験あってこそ出来ますか？

磯野：経験が活きてくる面はありますが、経験だけに頼らない、血液検査やレントゲンといった客観データをしっかりとる事が見落としを減らすことに繋がります。

渦巻：若手だけに言えることでなく、ベテランこそしっかり検査をすべきです。

牧野：今日来た猫ちゃんも皮膚の問題で来院されたのですが、以前から腎臓の数値が良くなかったので腎臓の検査も精査したところ､原因となる疾患が見つかりました。見落としがないようにする習慣こそが大切だと思います。

磯野：このグループはセカンドオピニオンも多いので、客観データを的確にデータで示せることが重要な面もあると思いますし、異常がないことを示すためにも検査は必要です。

医療の進歩に合わせ常に情報をアップデートして診察に臨んでいます。

Q：グループならではの特徴はありますか？

渦巻：難しい症例も受け入れる環境なので、昨日までの知識や経験で良しとせず、常にアップデートをする習慣を持っています。
そしてグループ内には様々な知識を持った獣医師たちがいるので、常に刺激をもらっています。

牧野：自分も含め、診療に出る獣医師全員が最低限の勉強を続けています。更にそれを見て後輩たちも刺激を受けていると感じています。
また若手の獣医師が質問しやすい空気感も大切にしています。相談のあった症例が快方に向かえば、一緒に「良かった」と喜ぶような空気があります。

磯野：グループ内で高度医療も行っているので、医療の進歩に合わせ常に情報をアップデートして診察に臨む必要があると思います。

Column グループを支える外部専門科外来

［皮膚科］
村山 信雄
アジア獣医皮膚科専門医
獣医師博士（獣医学）
- 東京薬科大学客員研究員
- 犬と猫の皮膚科代表

［麻酔科］
長濱 正太郎
獣医師
博士（獣医学、東京大学）
- 岐阜大学客員臨床准教授
- 日本動物麻酔科医協会（VAS を法人化）代表理事

［腫瘍科］
杉山 大樹
日本獣医がん学会
腫瘍科認定医１種
- 日本獣医がん学会副会長
- ファミリー動物病院院長

［麻酔科］
遠藤 雄介
獣医師
博士
- Feinstein Institutes for Medical Research 客員研究員
- 日本医科大学 救急医学講座特別研究員

獣医師／神経科
武藤 陽信
第２高度医療センター勤務

動物看護師
中村 紫鳳
第２高度医療センター勤務

動物看護師
齋藤 優美絵
第２高度医療センター勤務

「診断の取りこぼしを少なくする 1.5 次病院でこそ専門科の 存在意義が発揮されると思います」

専門医療ひとつの柱：脳神経外科チームの新たな挑戦

専科医療だとしても油断せず 他の病気の可能性にも目を向けます。 そのために必要なのは総合的な知見です。

Q：専門科があると何が変わりますか？

武藤：ひとつには症例の見過ごしや取りこぼしが少なくなること、さらには獣医師もスキルアップすることです。
神経科でいうと、除外診断が多く、似た症状を出す他の病気をしっかり理解して、ひとつひとつ除外していくことで「本当に神経の病気なのか」を見極めていかねばなりません。
他の病院でのケースですが、神経の病気なのではという先入観からレントゲンが撮られていないことがあり、撮ってみたら骨が溶けていたということもあります。
完全二次（高度医療のみ）の病院では、すでに絞り込みが行われた後の症例が紹介されてきます。ある意味では分かりやすい神経の症例が多くやってくることになり、その影には気づきづらい症例が見過ごされている可能性があります。
当グループのように専門医や認定医自身も一次診療も行う 1.5 次病院だからこそ、その知見を院内に共有することで、あらゆる可能性に目を向け取りこぼしがなく拾い上げる体制を築くことができると思います。
また、専科の存在により獣医師だけでなく看護師のスキルもアップしていると思います。

斎藤：神経科では手術して終わりではなく、その後のケアによって 1 日 1日の回復具合も大きく変わってくるので、より注意して目を配る習慣ができたと思います。

中村：獣医師たちは専門医の立場で臨みますが、看護師たちは現場で経験を積みながら、もっとしっかり勉強して底上げをしていこうと思っています。
一方で専門分野に視点が偏らないように、まずは基礎からしっかり身につけることで、専門分野へも生かされると考えています。

Q：チームの現状について？

武藤：グループ内では心臓外科が専科としても確立されつつありますが、神経科も豊富な経験を持つ第 2 高度医療センター長の大竹先生と私が中心となって立ち上げました。まだ完全に神経科チームだけの手術件数は少なく他の科の先生たちのサポートを受けながらですが少しずつ実績を積み上げています。

中村：手術中のサポートはもちろん、術後の入院管理についても、日々勉強を続けながら成長していきます。

成功のカギは院内での知識共有と連携体制

Q：専門科を確立する上で大切なこと？

武藤：病院が多拠点に分かれている事で、連携のタイミングにバラつきが出たり、実際に診てみないとわからないと感じることもあります。
しっかりとした連携体制を築くためには、グループ内の獣医師に病気について広く知ってもらうことが重要だと考えています。特に神経科は特殊で、脳のどこに病気があるのかで症状が変わってくるので、今は院内でセミナーを開催したりしながら「まず知ってもらうこと」から少しずつ知識をつけてもらうことを大切に活動を続けています。

Column 日本でも数少ない高度医療設備

［筋電図］

筋電図は筋線維から発生する活動電位を可視化することができ、筋肉の収縮性やその異常が筋肉疾患、神経疾患の何れかを調べることができます。

［脳波計］

脳波計は、頭部（頭皮）のあらゆる部位に電極を設置して、脳の電気的信号を記録する機械です。
脳波に異常が認められるということは、大脳の機能障害を示唆し、てんかん診断や脳死判定などに用いられます。

動物看護師
坂場 彩佳
市ヶ谷動物医療センター勤務

動物看護師
服部　充
もみじ山通りペットクリニック勤務

動物看護師
清水 七海
小滝橋本院勤務

「どうぶつと飼い主さんと獣医師 その間に立つ存在だからこそ すべての仕事に意味があります」

病院の印象を決める：受付を担当する看護師が築く信頼

人の役に立ったり 喜んでいただけることが モチベーションにつながっています。

Q：受付に立つ際に心掛けていることは？

服部：なんでもない話もあえてするようにしています。話しやすい存在になれることが、飼い主さんとの信頼関係を築く一歩だと思っています。

清水：何を目的に来院されたかによって自然に対応は変わっていくと思います。またお帰りになられる際も獣医師が伝えてなさそうな事のフォローは心がけています。例えば薬を処方したとき、これまで薬を飲んだことがなさそうだと感じれば、飼い主さんに確認して薬の与え方をお伝えしたり、なるべく疑問を引き出すようにしています。

坂場：忙しい日や混み合っている日は話しかけづらい雰囲気が出てしまいがちなので、なるべく飼い主さんの視線に気づいたりこちらからの声掛けを意識しています。あとは、継続して通院されている方には、事前にカルテを確認して変化を見逃さず、お声掛けを意識しています。

清水：飼い主さんに安心していただける受付は、患者さまについて把握している内容の量が違います。それによって飼い主さまと話す内容も変わってきますし、結果として受付の時点で引き出せる情報も多くなり、獣医師が診療にあたる際にとても役立ちます。

服部：逆に飼い主さんに伝えるべきことを獣医師から聞くときは、自分でもしっかり内容を理解するようにしています。仮に分からないことがあってもそのままにはしません。飼い主さんから質問などが出た際にしっかりと答えられることが大切で、安心にもつながると思います。

清水：受付に立つ際に一番のポイントかもしれませんが、獣医師と飼い主さん、双方が何を伝えたいのか意図をしっかり汲み取るよう心がけています。
自分の捉え方や思いが偏っていると一方に誘導してしまう恐れがあるので特に気を付けています。

Q：受付と看護師の両方を担当するやりがいは？

清水：私たち全員、両方やることのやりがいを感じています。

服部：はい。医療職って人の役に立ったり喜ばれることに喜びとやりがいを感じる人が多く、両方をやると単純にその機会が多いのでモチベーションになります。
また両方を担当する機会があることで、今までの経緯を流れで把握することができ、それによって看護にも良い影響があります。例えば、前回来院した際の受付で「検査の結果が悪かった」と残念がる姿を目にしたあと、次の診察で検査結果が改善していれば、経緯がわかる分より飼い主さんに寄り添えますし、自分ごとのように嬉しくなります。

清水：受付でしか得られないものもあります。受付を経験するからこそ話の引き出しも増えますし、診療補助をしているだけでは身につかないスキルです。

坂場：診療を受けるのが動物、お話を伺うのが飼い主さんと２面性を持つ動物医療だからこそ業務をすべてやることに、より意味があるのだと感じています。

Column　2022年、2023年の国家資格化に向けた支援

来年以降の愛玩動物看護師国家資格化に向けた予備試験や本試験に向け、グループ全体で応援しています。
全体会議の一部の時間を使った模擬試験の実施、関連事業の Mid Tokyo Vets の支援による予想問題の作成など様々なサポートを行っています。
いずれは専門性を持った動物看護師が増えていくことが予測されますが、まずは国家資格登録後の新たなカリキュラムやマニュアルも順次準備していき、動物看護師の仕事がよりやりがいのある、そして夢のある仕事にしていきたいと考えています。